

2021年3月28日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

申命記 30 : 15～20

ルカによる福音書 12 : 54～59

「今の時を見分ける」

<群衆にも>

今日の 54 節のところで、「イエスはまた群衆にも言われた」とあります。これまでイエスさまは、御自分に従う弟子たちに語りかけて来られました。しかしここからは、押し寄せて集まって来た群衆にも、再び目を向けられ、すべての者に語られます。

群衆というのは、イエスさまのところに来て、御言葉を聞いたけれども、従うことはしていない人々です。イエスさまに対して、関心を持つ者もいれば、一步離れて見ている者もいれば、反発心を抱いている者もいるでしょう。しかし、その時、イエスさまに出会っている、それらすべての人々です。

そして、「群衆にも」とあるように、これは当然「弟子たちにも」語られていることです。つまり、ここにいるわたしたちもまた、従っている者も、従っていない者も、誰一人例外なく、イエスさまに語りかけられているのです。

<今の時を見分ける>

さて、イエスさまはこう語られました。「あなたがたは、雲が西に出るのを見るとすぐに、『にわか雨になる』と言う。実際そのとおりになる。また、南風が吹いているのを見ると、『暑くなる』と言う。事実そうなる。偽善者よ、このように空や地の模様を見分けることは知っているのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか。」

イエスさまは、「あなたがたは、今の時を見分けることをしない」と、弟子たちと群衆に言っておられます。

最初に天気予報のようなことを言われていますが、イエスさまが生きておられた時代の、ユダヤ人たちの住むところ、パレスチナは、西に地中海を望みます。その海上に雲が湧くと、やがて雲が流れてきてにわか雨になる。また、南には砂漠がありますから、南風が吹くと熱気を運んで暑くなる。人々は地理を把握し、自然を観察し、これからの天気がどうなるか、気候がどう変化していくか、読み取ることが出来ました。それは、「実際そのとおりになり」

「事実そうなる」と言われているように、確信をもって見分けることが出来ることでした。

イエスさまは、そうやってあなたたちは空や地の模様を見て、それを確かに見分けることが出来る。それなのに、どうして今の時を見分けることを知らないのか、と問われます。

そして、このことは、57 節とも繋がっています。56 節との間に段落と小見出しがありますが、これは後から勝手につけられたもので、元々の文章はすべて繋がっています。

57 節には「あなたがたは、何が正しいのかを、どうして自分で判断しないのか。」とあります。これは「どうして今の時を見分けることを知らないのか」というのと、同じことです。

つまり、今のこの時、わたしたちには、見分けるべきもの、何が正しいか、判断すべきものが、目の前にあるのです。それは、実際そうなる、事実そうである、というほど確実なものなのです。それなのに、どうして何もしないのか。なすべきことを判断しないのか。イエスさまはそう、問うておられるのです。

<模様を見分ける>

さて、今の時を見分けなさい、と言われているのは、まず、今がイエスさまに従うべき時であることを見分けなさい、ということです。

当時、イエスさまの周りに集まっている群衆はユダヤ人で、みな先祖から神の民として、神さまの御言葉に従って歩もうとしている人々です。そして彼らは、神さまが遣わして下さる救い主を待ち望んでいた。救いを求めていた。そして今、神さまに救い主として遣わされた神の御子が、目の前にいるのです。今、イエスさまは、群衆の目の前におられます。御言葉を語り、御業を行ない、神の国を告げておられます。

それなのに彼らは、従おうとしない。御言葉を受け入れようとしない。それどころか、イエスさまを受け入れず、殺意を抱く者までいます。

目の前にははっきりと救い主が示されているのに。御言葉が語られているのに。救いに招かれているのに。神のご計画が示されているのに。なぜ、受け入れないのか。なぜ、信じようとししないのか。

これは、わたしたちも同じです。聖書の御言葉を聞いた者は、イエスさまと出会っているのです。ここに救いがあると告げられているのです。そして、すべての者は、この救いを受け入れるか、受け入れないかを問われています。救いの恵みを示されている。罪の赦しへ招かれている。恵みへ飛び込む時、従うべき時は、今この時なのです。

イエスさまは語られます。あなたがたは、空や地の模様を見たなら、どうなるか、それに対してどうすべきかを知ることが出来る。それなら、この今の時も、あなたはわたしを見て、言葉を聞いて、どうすべきかを見分けるべきではないか。救いへの招きを受け入れるべきではないか。そう問われています。

<今の時とは>

そして、それと同時にもう一つ、わたしたちは自分自身が、今の時、どういう状況にあるかを見分けなければなりません。

つまり、救いを知らされ、その恵みを受け入れるべき時である、ということは、自分自身が救われなければならない者であること、罪人であることを認める時でもあるのです。

あなたが自分の状況を知ったならば、あなたたちは今の時を見分け、何が正しいかを、自分で判断するはずだ。イエスさまはそう言って、具体的なことを語られました。

58 節以降にはこのようがありました。「あなたを訴える人と一緒に役人のところに行くときには、途中でその人と仲直りするように努めなさい。さもないと、その人はあなたを裁判官のもとに連れて行き、裁判官は看守に引き渡し、看守は牢に投げ込む。言うておくが、最後のレプトンを返すまで、決してそこから出ることはできない。」

イエスさまは、あなたは今の時、訴える人と一緒に役人のところに行くところなのだ、と語っておられます。これは、たとえではありません。今、実際にわたしたちは、わたしが犯した罪を訴えようとする人と一緒に、裁判の場所へと向かっているところなのです。

59 節に「最後のレプトンを返すまで」とあります。レプトンは、当時のお金の最小の単位です。つまり、わたしは一緒に歩いている人から借金をして、それを最後の円まで返済しなければならない状況にある。そんな状況で、裁かれるところへ向かっている、ということです。そのわたしが今なすべきこと。それは、借金を返そうと努めることです。

ここで言われているのは、わたしたちの罪の問題です。聖書では、罪は借金の負債にたとえられます。負債は、すべてを返済するか、貸した人が免除しない限り、勝手に無くなって消えることはありません。罪も同じです。罪は、自分で償うか、あるいは相手が赦してくれるのでなければ、解決することはないのです。

わたしたちは、神さまに対して罪を犯しています。それは、神を神とせず、自己中心的に、自分を主人として歩むことです。そして、この神さまに対する罪は、隣人に対する罪として、わたしたちの生活の中に具体的に現れています。

神さまは、わたしたちに、神さまを愛し、隣人を自分のように愛することをお命じになりました。しかし、わたしたちは、神さまに背き、自分のことを優先し、自分のために生きようとします。共に愛し合い、助け合って歩むべき隣人を、傷つけ、あるいは無視し、負債を重ねています。

そして、わたしたちは、それらの隣人と共に、今、裁判官のところに向かって歩いている途中なのです。負債を返さないままで、歩いているのです。

このままであれば、彼らは裁判官のところに着いたら、わたしをすぐに訴えるでしょう。裁判官は、神さまです。わたしたちは、互いに相手を裁くことは出来ません。すべてを最後にお裁きになるのは神さまです。そこで裁きが行われるでしょう。負債を返さないなら、有罪となり、牢に投げ込まれると分かっています。

そうであるならば、あなたは、その裁判官の所に着いて牢に投げ込まれる前に、今、その隣人に、負債を返そうと努めるべきではないのか。仲直りが出来るように努めるべきではないのか。今、何をすることが正しいことか、どうして判断しないのか。

イエスさまは、そう語っておられるのです。

仲直り、というと手を取り合うような、優しい感じに聞こえますが、この言葉は、相手か

ら解き放たれる、という意味の言葉です。借金をした相手から解放されるためには、単なる「仲直り」などという生易しいものではなく、自分の負債をはっきりと認め、それ相応の償いをしなければならないのです。

ですから。ここで、わたしたちが見分け、知るべきことは、「今の時」、わたしたちは、裁き主である神さまの御前に向かって、歩いている途中なのだという事です。そして、自分が借金を負っている負債者である、罪人である、ということです。

わたしたちは、自分の人生を終えたなら、必ず神さまの御前に立ちます。そして、裁きを受けるのです。しかし、わたしたちは、終わりの日に、自分が神さまの御前に出ると真剣に思っていない。自分が罪人であると思っていない。だから、今この時も、なにが正しいかを判断せず、なすべきことをしていないのだ、とイエスさまは仰るのです。

<罪>

このイエスさまの御言葉にドキッとして、胸が痛む人がいるかも知れません。罪の重荷を感じて、押し潰されそうになって、でもどうすれば良いか分からなくて、途方に暮れている人がいるかも知れません。

でも中には、わたしは負債を返すべき人などいない。みんなとうまくやっているし、誰かに赦してもらわなければならないようなことはしていない。むしろ、謝ってもらいたい人さえいる。そう思った方もいらっしゃるかも知れません。

でも、イエスさまは、56節で、弟子たちに、群衆に、わたしたちに、「偽善者よ」と言われました。イエスさまは、わたしたちの心の内を見抜いておられます。罪を隠していることを。自分を正当化していることを。自分の隣人への態度には問題がないと、高を括っている、ということ。

隣人に対する罪とは、単に、損害を被らせたとか、傷つけてしまった、ということだけではありません。ベイリーという人の祈りの本があるのですが、そこには悔い改めの祈りの言葉が述べられています。ここであげられる罪に自分は一つも当てはまらない、という人はいないと思います。それは、このような祈りです。(ベイリー『朝の祈り 夜の祈り』より)
「…主よ、おゆるしてください。

他の人びとに要求する目標を、自分にあてはめなかったことを

他の人びとの苦しみに目をつぶり、自分自身の苦しみに学ぶのが鈍かったことを

自分にかかわりのない悪事に対しては無関心でありながら、自分の身におよぶ悪に対しては過敏であったことを。

となりの人の善と、自分の悪とをみとめるに遅かったことを

となりの人のあやまちに対しては心をかたくなにしつつ、自分のあやまちにはいつでも寛大であったことを

あなたが、わたしには小さい仕事を、わたしの兄弟には大きい仕事を与えられたことを信

じようとしなかったことを 主よ、おゆるしてください。」

赦しを願うべき隣人への罪とは、直接的に傷つけたことだけではありません。隣人の苦しみに鈍感であること、無関心でいること、目を背けること、嫉妬心を抱くこと、批判的であること。それなのに、自分の苦しみには敏感であったこと、自分の損害には大騒ぎをしたこと、自分の失敗には寛大であったこと。

わたしたちは、隣人との関わりの中でこそ、神さまを主人として歩むことが出来ない罪、自己中心的な、自分勝手な歩み、傲慢な歩みをする罪の姿が、浮き上がるのです。

イエスさまは、わたしたちに、そんな自分の姿を見つめなさい、と言われるのです。神さまに対して、そして隣人に対しても、罪を犯していることを認めなさい、と言われるのです。わたしたちは、これらの罪を抱えながら、神さまの裁きの御前へと向かっている途中なのです。この状況を知るならば、今の時、わたしたちはなすべきことをしなければならぬことを、知るでしょう。何が正しいかを、判断するでしょう。

それは、あなたを訴える人と、途中で仲直りをする事です。共に、神さまの御前に向かって歩んでいる隣人に対して、愛を持って接し、関わりを持ち、必要であれば償いをし、共に生きようとする事なのです。

<主の十字架>

しかし、この教えは、そのようにわたしたちが、隣人に尽くして、罪を赦してもらわなければ、人生の歩みを終えて神さまの御前に出た時に、裁きを受けて、有罪の判決を下される。だから、一所懸命何とかしなさい。頑張りなさい、ということなのではないでしょうか。それは、自分の力で、無罪を勝ち取れということでしょうか。

そしてまた、わたしたちは、あらゆる隣人に訴えずに、すべての隣人を愛して、罪を犯さずに歩いていくことなど出来ない。最後のレプトンまで返すことなど出来ない、ということも、よく知っているのではないのでしょうか。結局、裁かれ、有罪になることは免れないのではないのでしょうか。

だからこそ、イエスさまは、神さまの裁きを見つめさせられたのです。わたしたちの罪を見つめさせられたのです。そして今、ご自分の十字架の道に従いなさい、と言われるのです。

わたしたちにはイエスさまの十字架が必要なのです。自分でもどうにもならない罪。自分でも思い通りにできない罪。神さまに従えず、隣人を傷つけることばかりの、償いきれない罪。この罪に捕らわれたわたしたちを、神さまは憐れんで下さり、ご自分の御子イエスさまを遣わして、わたしたちの罪を解決する道を示して下さいました。そのために、イエスさまに、わたしたちの裁きをすべて負わせられたのです。

わたしたちが終わりの日、多くの罪を抱えたままで、神さまの御前に入る時。裁きの場で、わたしたちの前にはイエスさまの十字架が立てられており、この方が、あなたの罪をすべて

償って下さった。この方によって、あなたは罪人でありながら、しかしその罪は赦されている。その宣言されるのを聞くことが出来るのです。

イエスさまの救いの御業を信じるならば、この宣言を聞くことが出来る。このことを信じなさい。信じて、今の時を歩みなさい、と言われていたのです。

この罪を赦して下さる、という救いの知らせが、裁きの場所へ向かう途上にあるわたしたちに、今、届けられています。イエスさまご自身が、わたしたちのところに来て、この救いの知らせを届けて下さったのです。イエスさまは、罪に捕らわれ、神さまに逆らい、隣人を苦しめて歩んできたあなたを解放するために、あなたの罪を赦すために、今あなたの目の前にいるのだ、と言って下さるのです。

この方にすがらないで、どうしましょうか。この約束に頼らないで、わたしはどうやってこれから正しく歩むことが出来るでしょうか。

今の時は、わたしたちにとって、この救い主を受け入れる時。そして、罪の赦しを信じつつ、隣人に対してなすべきことをする時であることを、見分け、判断する時なのです。

<神さまに向かって>

しかし中には、もしイエスさまによってもう赦しを与えられているなら、このまま努力しなくても、いいのではないか。何をしても、自分の歩みは結局、罪ばかりなのだから、隣人に負債を返す努力をしても無駄だし、神さまが赦してくれるのならそれでいいのではないか。そう考える人がいるかも知れません。

でもそれは、イエスさまの十字架の死の重みを分かっていません。わたしの罪のために、一人の人が死んだのです。いや、神の御子が死んだのです。わたしの代わりに裁きを受け、鞭打たれ、侮辱され、十字架に架けられ、血を流して、叫ばれて死んだのです。この方の前で、なお自ら罪を重ねるべきでしょうか。この方は、わたし自身を罪ごと背負って下さっているのに、なお罪の重荷を加えて、イエスさまの痛みを増やすことが、正しいことでしょうか。

イエスさまが、ご自分の命によって罪から解放して下さい、神さまと隣人との「仲直り」を得させて下さり、この赦しの中で生きなさい、と言って下さったのです。わたしたちが、互いに赦したり、赦されたりすることはとても困難です。しかし、共にイエスさまの罪の赦しの十字架の下に立ち、共に歩き、共に神さまの御前に入るなら。神さまがわたしたちの罪を解決して下さいなのです。

わたしたちはもはや、罪に捕らわれて生きるのではなく、イエスさまの恵みに捕らわれています。終わりの裁きの日を、有罪の宣告の時ではなく、罪の赦しを宣言される、救いの完成の時として待ち望んでいます。

「どうして今の時を見分けることを知らないのか。あなたがたは、何が正しいかを、どうして自分で判断しないのか。」

イエスさまは、あなたがたは、今の時を見分けることができるはずだ。あなたがたは、何

が正しいかを、判断することが出来るはずだ、と言っておられます。そのために必要な恵みは、イエスさまご自身が十分に示し、与えて下さったからです。

今日から受難週に入ります。イエスさまが、わたしの罪を担うために、十字架に向かって歩まれたことを覚える一週間です。

御心に従って歩むことのできない、隣人を愛することのできない、自分の罪を見つめましょう。しかし、その罪を解決して下さい、イエスさまの十字架を見つめましょう。今の時、この方に従い、そして隣人になすべきことを判断できるように、聖霊を祈り求めましょう。

【お祈り】

天の父なる神さま

今日は棕櫚の主日です。受難週が始まり、イエスさまが十字架に向かって歩まれる一週間を覚える日々を過ごします。今わたしたちは、イエスさまが成し遂げて下さった、罪の赦しのための十字架の死と、そして復活の希望とを示されています。そして、あなたの御前に出る時に向かって、兄弟姉妹、また隣人と共に歩んでいます。

わたしたちが、今の時を見分けることが出来ますように。イエスさまの十字架を受け入れ、従う時であること。自分の罪を認めること。そして、神さまを愛し、隣人を自分のように愛する、まことの正しいことが何かを、今の時、判断することができますように。

どうか聖霊が働いて下さり、わたしたちが誰かと語る時、共に過ごす時、また弱さや困難の中にある人と出会う時、神さまが望まれていることを判断し、なすべきことをなす力が与えられますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン